
The magic world adventure

鬼人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

The magical world adventure

【Zコード】

N4968Z

【作者名】

鬼人

【あらすじ】

科学では起こりえない事、それを人は何と呼ぶ？

人はそれを魔法、あるいは超能力、またあるいは幻想と呼ぶ。

この物語は科学の世界とはまた違う世界、魔法の世界で起こる出来事である。

プロローグ むね様の口（漫畫版）

誤字や脱字があること思ひます。

何よりつまらないと思います。

そんなんでも、読んでいただければ光栄です。

プロローグ あの日の日

その日は雨だった。周りの音をすべてかき消すかのよつて、土砂降りの雨が降っている。

少年は血の海の中にいた。なんで俺はこんなところにいるって。今まで、家族と夕飯食べてたじゃないか。それなのになんでこんなに体中が痛いんだ?なんで?

「おひつじのクソガキ!生きてんだろ?」

少年は腹を蹴られて俯せになった。くそ…何なんだよ、こいつ。

少年は立ち上がりうとしたが、それすらできなかつた。駄目だ、体に力が入らない。視界もぼやけて殆ど見えない。

だが、誰かが少年の見覚えのある人物を取り囲んでいるのは見えた。

頼む、やめてくれ。そいつは…そいつだけは…

「さあクソガキ、残るはお前だけだぜ」

自分に伸し掛かって銀色に光る剣を振り上げている男が、少年にはハッキリ見えた。

俺は…ここで死ぬのか?別にいい、もつ誰も残つてないんだから…

『お前はここで死を選ぶのか?』

突然周りの時間が止まり、少年の目の前は真っ暗になった。

第一話 一人の冒険者

竜の地の最南端に位置する小国、フェアーナ。その首都であるレツザンの街の中を、ナウル・テスフィードは一人の男を追いかけて走り回っていた。いや、走り回っていると言うより、少々表現がおかしいかもしれないが、「遊んでいる」と言つた方がいいだろうか。

ナウ「ハツハツハ！ビリしたおっさん、もう逃げないのか？」

民家の屋根の上から見下ろしながら走つと、男は腰を抜かして石畳の地面の上に座り込んだ。

男「くそつ！化け物め！」

そう言つ男は、涙目になつていた。

ナウ「なんだ、もう終わりか？」

ナウルはニヤニヤ笑いながら屋根の上から飛び降り、男の目の前にスタッフと着地した。

ナウ「逃げないのか？折角「俺から逃げたら捕まえない」って言つてたのに」

男「ふざけんじゃねえ！家の屋根の上にヒョーヒョーヒョーヒョー飛び乗るような奴から逃げられるわけねえだろ！」

ナウ「いや、屋根に飛び乗つたくらいで驚かれても困るんだが…って言つたが、あれぐらいなら誰でも出来るだろ？」

首を傾げながら聞くと、男はクワツと田を見開いた。本当に不細工な顔だ。

男「俺はお前みたいな化け物じゃねえ、普通の人間だ！普通の人間が垂直に五メートルも飛べるか、ああ？大体こつちは喋るのもやつとなのに、なんでお前は息切れ一つしてねえんだよ…」

ハツハツハ、よくあるよくある…と笑つて受け流そうとしたが、男は「無えよ…」と怒鳴り返してきた。

ナウ「とかなんとか言いながら、べラべラ喋つてるじゃねえか。それより、もう逃げないのか？俺はまだまだ行けるぞ？」

男「畜生！まさか噂に聞いた女神の騎士団の冒険者がここまで化け物だつたなんて…聞いてねえぞ…」

なんだ、このおっさん俺等のこと知つてるのか。

ナウ「そりや、おっさんには一言も言つた覚えないからな。大体、何十人も賞金首が俺達に捕まつてゐるのに、なんで自分は大丈夫なんて思つたんだ？」

男「別にそんなことは思つてねえ！ただ噂に聞いてただけだ。それに俺は中央平原の方から來たから、あんたらのことは殆んど知らねえんだ！」

ナウ「中央平原の方じゃなくても、女神の騎士団の情報は殆んど外に流れてないから、知らなくて当たり前だ。で、本当にもう逃げないのか？」

ナウルが性根の悪い笑みを浮かべると、腰を抜かしていた男は慌てて石畳の上に膝まづいた。

男「なあ、頼むよー今回だけでいいんだ、見逃してくれ！」

半泣きになつて顔をくしゃくしゃにしながら、男はナウルの足元にしがみついた。情けないにも程がある。大の大人が、自分の半分も年齢がいつてない青年に、泣いて懇願してどうすんだよ…

ナウ「取りあえず、その汚い顔を近づけないでくれ。それから、今更泣くぐらになら、最初つから犯罪なんかに手出すんじゃないよ」

冷たい目で見下ろしながら囁つと、男は不細工な顔をせりてくしゃくしゃにした。

男「仕方なかつたんだーどうしても金が欲しくて… 飲えて死にそうだつたんだ！」

男は、ナウルの近づくなといつ忠告など全く聞いていなかつた。そのまま死んだほうがよかつたんじゃないか?と巫山戯て言あつとしが、流石にそれは酷いと思い自重した。

ナウ「金がなかつた? 飲えて死にそつた? 何を都合のいいこと言つてんだ、ハゲが。強盗事件何回も起こして、指名手配されてるくせに」

男「一回に盗れる金額が少ないんだ。それに食費とかでどんどん無くなつてくし…」

ナウ「眞面目に働くつじゆるー。」

男「過去に一回強盗やつたってだけで、指名手配されて働き口なんか見つかるわけないだろー。」

ナウ「…それもやつだな」

確かに、このおっさんの言つこと、分からぬでもない。食べていいことが出来なくなつた者が取る方法は一つ。眞面目に働くか、犯罪に手を染めるかだ。まだ二十代やそこらで、親や頼れる兄弟がいるならともかく、このおっさんの年齢からしてそんなあてもないだろー。このおっさんは一番手つ取り早い方法を選んだのだ。

ナウルは少し後ろに下がり、男をしつかり見た。ボサボサの髪の毛に、何度も見ても不細工な顔。薄汚れた服を着て、腰からは長剣が下がっている。よく見ると、体もかなりがつしりしていた。

ナウ「おっさん、見たところ元傭兵か？剣持つてるし、年の割に体力あつたし」

今思つたのだが、その腰についている剣で戦おうとは思わなかつたのか？

男「ああ、一応はな。これでも、中央平原の方じやあ、やじそじ名の卖れた傭兵だつたんだぜ」

男は必死にナウルの気を逸らしつとつしている。逃げるチャンスを窺つてゐるのか、それとも俺がおっさんを捕まえるのを忘れるとも思つてゐるのか？もしかして、ただ開き直つただけか？

ナウ「まあ、そんな」とぱざりともいい。逃げる気がないんなら、大人しく捕まつてもいいぜ」

「やつきながら立ち上がるとしていた男の顔が、再びくしゃくしゃになつた。

男「なあ頼む、頼むよ！今回だけいいんだ、見逃してくれ！次にお前が俺を見つけた時は、その場で俺を殺しちまつてもいいから！」

駄田だ、このままじゃ話が進みそうになん。このおつせんは口が開く限り、同じことを言い続けるだらつ。

ナウ「仕様がねえな。本当に今回だけだぞ」

男は不細工な顔を上げ、目を見開いてナウルを見た。

男「本当に逃がしてくれるのか？」

ナウ「ああ、いこよ。そこまで言つんなら逃がしてやる。ひとつと消えろ」

ナウルは虫を追い払つように、しつしつと手を振つた。これで男は背中を向けて一田散に逃げ出す…かと思つたが、なぜか男はニヤニヤ笑いを浮かべてその場から動くことしなかつた。

ナウ「なんだよ、気持ちわりいな。ひとつと消えろっての」

男「お前、年はいくつだ？」

年?なんだつてそんなこと聞くんだ?

ナウ「二十一だけど、それがどうかしたのか?」

男「そうか、二十一か。若いのにそんな仕事してたら大変だろ」

ナウ「何が言いたい?」

男はニヤニヤ笑いを浮かべたまま、ナウルに近づいてきた。

男「実はなあ、いい仕事を知ってるんだ。冒険者なんかよりもずっと儲かる仕事だ」

ナウ「いい仕事?」

男「そうだ。俺みたいな犯罪者が、大勢集まって組織を作ってる。そこにお前も来ないか?お前みたいに強い奴は大歓迎だ」

ああ、なるほど。確かにそれは儲かりそうだな。ナウルは男の真似をするように、ニヤリと笑つた。

ナウ「そいつはいいね。正直、俺もこんな仕事つんざりしてたんだ。是非そこに入れてくれよ」

男はニヤニヤ笑いをやめ、代わりに極悪な笑みを浮かべた。

男「ハツハツハ!流石だ、解ってるじゃねえか。よし、じゃあ俺について来て。サードストリートの古いボロ宿にアジトがあるんだ。ここは…セカンドストリートの住宅地だから、まっすぐ行けばそのままサードストリートに出るはずだぜ」

男は早速歩きだした。ナウルはその後ろについて行く。

ナウ「へえ、そんなところにあるのか?」

男「ああ。今は色んな犯罪者も合わせて百人近く集まってる。大物の賞金首とかはいねえが、質より量だからな」

ナウ「へえ、そんなにいるのか」

男「いやー、あれだけの人数集めるのは苦労したぜ。なんせ普通の人間じゃなくて犯罪者を集めてんだ…」

トンツ

ごく短い小さな音がした。だが、男はその音に気付かなかつた。何故なら、音を聞く前に男は既に気絶していたからだ。男の体がグラツと傾いで、石畳の上に倒れた。ナウルが首に手刀を入れ、気絶させたのだ。

ナウ「つたぐ、そんな危ない仕事に手出すわけねえだろ? が、馬鹿か! それ以前に初めて会つたやつに、べラべら喋つてる時点でアウトだ」

ナウルは倒れている男を担ぎ上げると、肩に乗せた。犯罪に手を染めるほど困つてないつての。それに冒険者としての仕事だつて、十分楽しんでる。逃げ回るアホな賞金首を捕まえることとかは、特に楽しいなwww

ナウ「それについても、このおっさん良いこと教えてくれたなあ。サ

ードストリートの古い宿に犯罪者百人か、潰し甲斐があるじゃねえか

？「おーい、ナウルー！」

突然名前を呼ばれて、ナウルは声のした背後を振り返った。一〇〇メートルぐらい先だろうか、誰かがナウルの方に向かって走つてくる。

あー、そうだった。おっさん追いかけるのに夢中だったから置いて来たんだった。

暫くすると、ナウルのパートナーであるカチュア・ドラゴニクスが、息を切らしながら追いついた。

カチュ「ハア…ハア…あんた、速すぎでしょ…」

カチュアは額にうつすらと汗を搔いていた。ナウルと同じ二十一歳で、綺麗な顔立ちに似合つ長い金髪の持ち主だ。

ナウ「仕様がないだる。お前のペースに合わせてたら、このおっさん逃げちまうんだから」

カチュアは肩で息をしながら、顔を上げた。

カチュ「ハア…ハア…走るの苦手なのよ」

ナウ「昔つからせうだもんな。それより、おっさんは捕まえたからギルドに戻るぞ」

カチュ「ハア、ちょっと酷くない？折角ここまで走ってきたのに」

ナウ「酷くない、遅い方が悪いね」

ナウルは意地悪く笑いながら歩き始めた。仕方なく、カチュアも後を追う。ナウルの性格が悪いのも昔からだ。

カチュ「その人、どうやって捕まえたの？」

カチュアは氣絶している男の顔を見ながら聞いた。

ナウ「どうやって、って言われてもなあ。ちょっと油断させてから隙突いて氣絶させたんだ」

カチュア「フーン、そんなことしなくてもナウルなら一瞬で終わつたんじゃない？」

ナウ「まあ、そただけどそれじゃあ面白くない。逃げ回つてるのを追いかけるのが、楽しいんじゃないか」

カチュアは苦笑せざるを得ない。性格の悪さも、ここまで来ると少し怖い。

カチュ「楽しいかどうかは知らないけど……って言つか、私が来るまで結構時間あつたでしょ？何やってたの？」

ナウ「ああ、そうだ。ついでにのむせんに良い」と聞いたんだ

カチュ「へえ、何聞いたの？」

ナウ「このおっさんの話によれば、サードストリートの古いボロ宿に犯罪者が集まって組織作ってるらしい」

カチュ「その話…本当なの？」

カチュアはかなり訝しそうな顔をしている。まあ、信じないのが普通だろうな。

ナウ「俺が見た限りじゃあ、嘘言つてるようには見えなかつた。なんせ、『お前も来ないか？』って言われたからなwww」

カチュアは一瞬心配になつたが、その男を肩に担いでいるといふことは断つたといふことでいいのだらう。

カチュ「そこまで言われたんなら、本当かもね。じゃあ、帰つたらすぐそこ行くの？」

ナウ「面倒だから報告だけして他のやつらに行かせる。百人ぐらい集まつてるらしいから、油断しないように言つとかねえとな」

カチュ「あんたも行きなさいよ…」

二人はセカンドストリートを抜けて、街のメインストリートに出た。既に日は高く上り、昼時を少し過ぎたぐらいだ。首都だけあつて人通りも多いため、中年の男を肩に担いだナウルは道行く人の視線をすべて集めていた。道で遊んでいる子供も、立ち話をしていた近所の奥さんも、買い物していた若い娘も嫌でもナウルの方に視線が来ていた。

ナウ「さあて、帰つたら酒でも呑むかな

カチュ「あんた、堂々としそぎでしょ…」

ナウルと違つてカチュアはかなり恥ずかしそうだ。隣にいるだけで、カチュアにもかなり視線が集まる。

ナウ「堂々としてればいいんだよ。おどおどしてたら逆に恥ずかしい。どんな時でも、余裕を持つて損はないぜ?」

カチュ「いや、まあ…やうだけ…」

ナウ「それに俺は賞金首を捕まえたんだぜ。堂々としても問題ないだろ」

カチュアはハーグとため息をついた。残念だが、反論できないのが悔しい。何を言つても、ナウルは自分の考えを変えないだろう。

カチュ「それにしても、犯罪者が百人も集まってるなんて。まだまだ物騒ね」

ナウ「いや、案外そうでもないかも知れないぞ」

カチュ「ん? なんで?」

ナウ「最近、賞金首が減つてきてる。」おつせんの教えてくれたアジトにいるのも、もしかしたらレザンにいる最後の賞金首かもしれない

カチュ「だといいんだけどね」

ナウ「まあ、俺は報告するだけだ。後は他に任せろ」

ナウルはそう言いながら、ギルドの扉を開けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4968z/>

The magic world adventure

2012年1月14日16時54分発行